

後三年合戦と 横手の歴史



金沢柵推定地・陣館遺跡と金沢城跡・景正功名塚周辺（南上空より）



景正功名塚で出土した柱材（南より）



金沢柵の戦い（後三年合戦絵詞・下巻より 戎谷南山筆）



美郷町

横手市の北に位置し、横手と同じく「金沢」の地名を持ちます。後三年合戦の古戦場は、横手と美郷にまたがることから、発掘調査や観光振興などで連携した取り組みを行っています。

横手市

秋田県南部に位置し、歴史上名高い後三年合戦が繰り広げられました。国史跡大鳥井山遺跡をはじめ、金沢柵や沼柵などの発掘調査を行い、史跡や文化財を活かしたまちづくりを行っています。

平泉町

2011年6月、世界文化遺産に登録されたことや中尊寺金色堂などで広く知られていますが、横手と平泉には歴史的なつながりがあります。この縁が元で、観光振興などで連携した取り組みを行っています。

交通のご案内



飛行機 — 秋田空港（道路アクセス約1時間）—

- ◎東京～秋田（9便/日）1時間5分
- ◎大阪/伊丹～秋田（6便/日）1時間20分
- ◎中部～秋田（2便/日）1時間30分
- ◎札幌～秋田（4便/日）1時間5分



鉄道

- ◎秋田～横手（JR奥羽線）1時間5分
- ◎平泉～横手（JR東北本線、JR北上線）2時間13分
- ◎盛岡～大曲～横手（秋田新幹線、JR奥羽線）1時間28分
- ◎仙台～大曲～横手（秋田新幹線、JR奥羽線）2時間21分
- ◎東京～大曲～横手（秋田新幹線、JR奥羽線）3時間39分
- ◎仙台～北上～横手（東北新幹線、JR北上線）2時間23分
- ◎東京～北上～横手（東北新幹線、JR北上線）3時間57分



車 — 東北・秋田自動車道利用 —

- ◎秋田～横手 52分
- ◎北上～横手 48分
- ◎仙台～横手 2時間6分
- ◎東京～横手 5時間30分

QRコード



後三年合戦
特設ホームページへ



増田の伝建
特設ホームページへ

お問い合わせ

秋田県横手市教育委員会
教育総務部文化財保護課

〒013-0060 秋田県横手市条里一丁目1番64号
TEL0182-32-2403 FAX0182-32-4034
URL <http://www.city.yokote.lg.jp>
E-mail bunkazaihogo@city.yokote.lg.jp

横手市遺跡調査事務所

〒013-0105 秋田県横手市平鹿町浅舞字釜池175番地
TEL0182-24-3480 FAX0182-24-3481

後三年合戦について

後三年合戦のあらまし

「後三年合戦（1083～1087）」は、永承六年（1051）に始まった「前九年合戦」の結果、北東北で勢力を誇るようになった清原氏の内紛に、陸奥守として赴任した源義家が介入して起こった日本史上において名高い合戦であり、横手市・美郷町を舞台に繰り広げられました。

奥六郡（現在の岩手県）を治めていた清原真衡は、当時一族の合議制であった仕組みを変えて、後の平氏や源氏のような棟梁に権力を集中させた武士団への変革を目指しました。そのため、真衡は名門である海道平氏から成衡を養子に迎え、源義家の妹を成衡の妻にすることを画策しましたが、これに一族の長老である吉彦秀武と、弟の清衡と家衡が反発し、「後三年合戦」の幕が開きました。

真衡は争いの途中で病死してしまいますが、義家が行った真衡の領土配分をめぐる、清衡と家衡の異父兄弟が争い、妻子を弟家衡に殺された清衡は、源義家に助けを求めました。

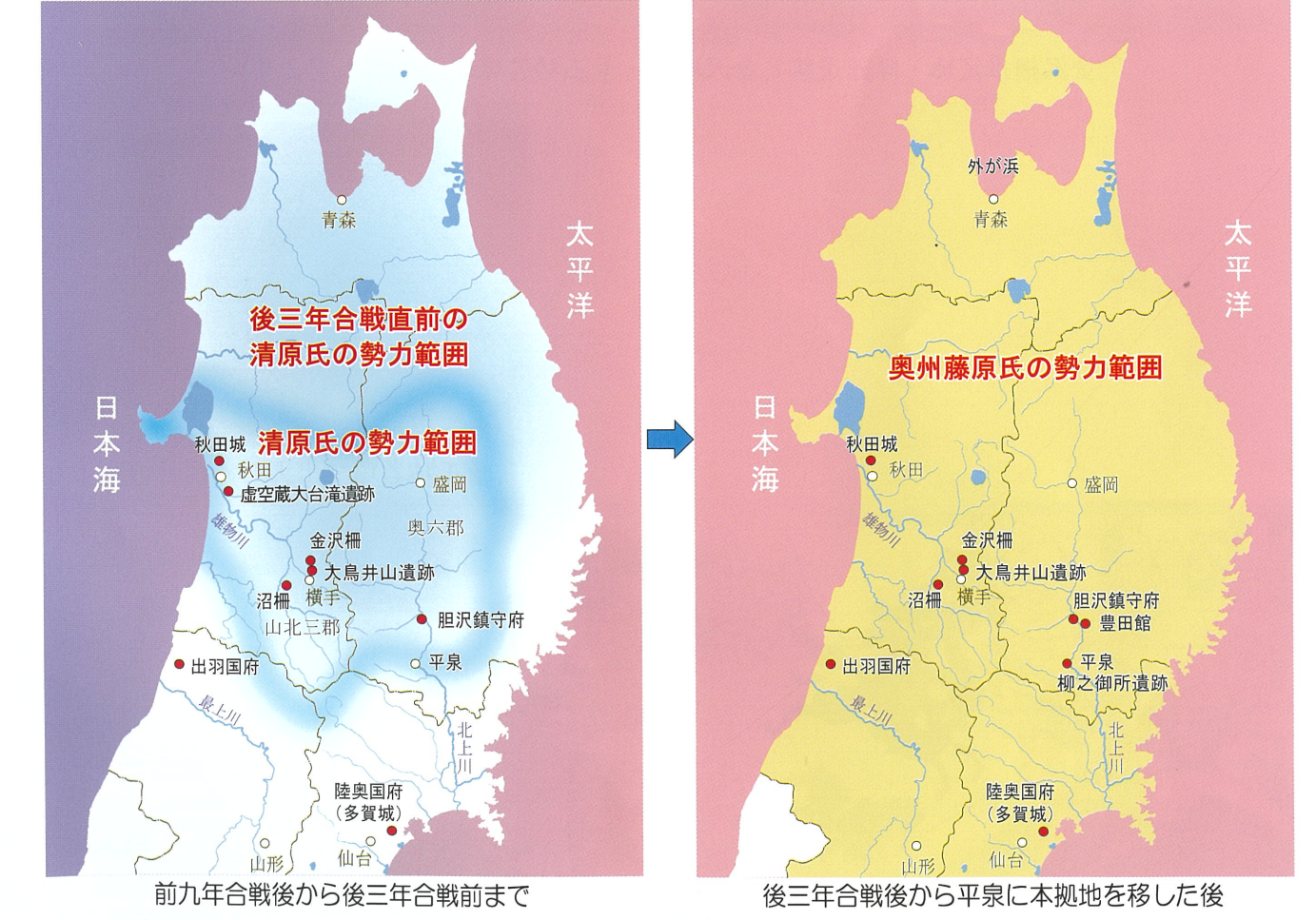
沼柵（現在の雄物川町沼館地区）にたてこもり、義家軍を退けた家衡は、叔父である武衡のすすめで、難攻不落とされていた金沢柵（現在の金沢地区）に移りましたが、義家軍の日本初といわれる兵糧攻めにあい、金沢柵が焼け落ち合戦は終わりました。

後三年合戦は、後の世に二つの大きな影響を与えたと考えられています。

一つは、清原氏として唯一生き残った清衡が、奥州の遺産を受け継ぐことになり、姓を「清原」から「藤原」へ戻し、以後約80年にわたる平泉黄金文化のいしすえを築いたことです。

もう一つは、合戦に勝利したものの、朝廷から恩賞をもらえなかった源義家が、私財をもって部下の功労に報いたことで主従関係が強まり、このことが源氏の名声を高め、後の鎌倉幕府などの武家政権の成立のきっかけとなったことといわれています。

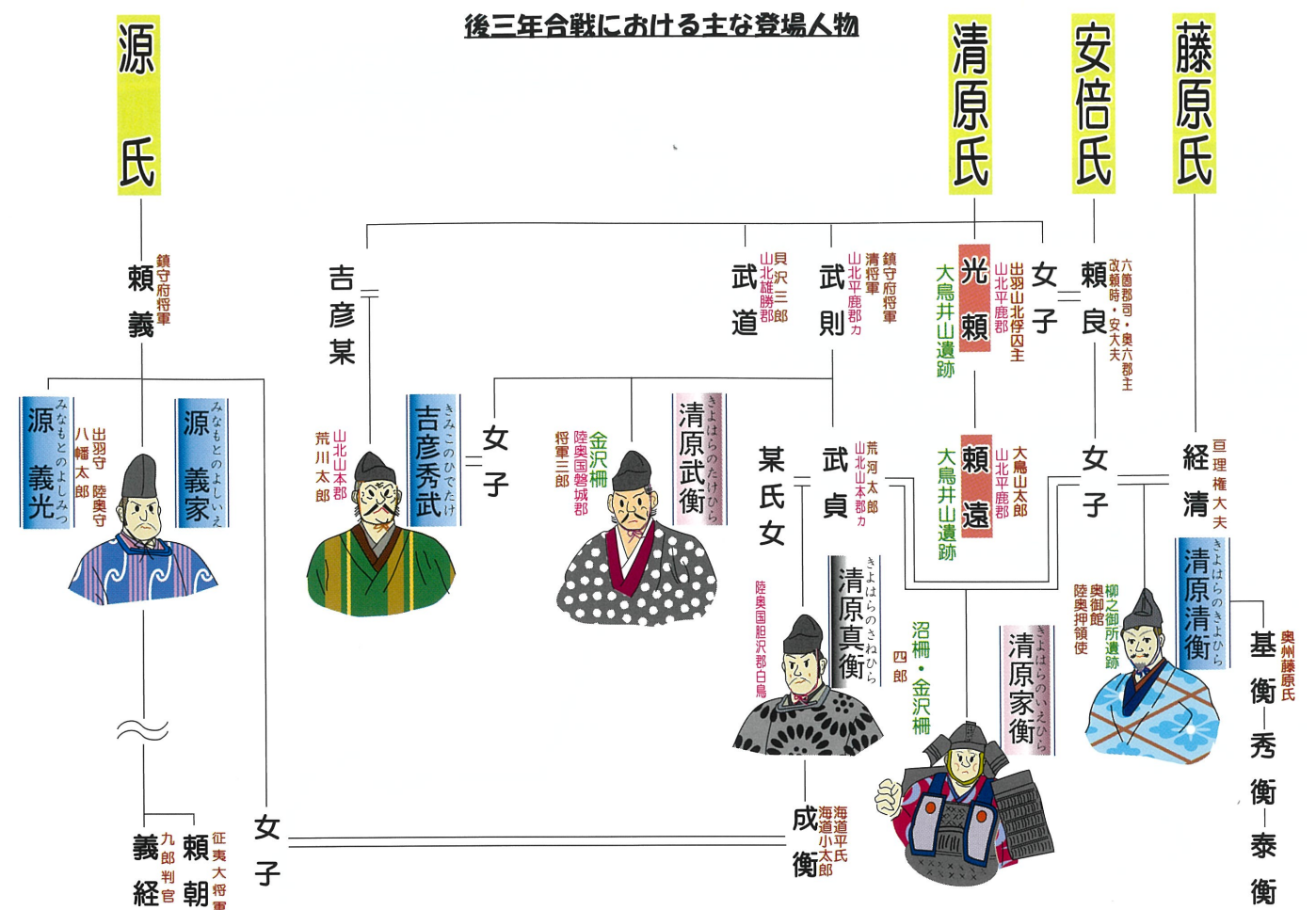
清原氏から藤原氏への勢力範囲の変遷



前九年合戦後から後三年合戦前まで

後三年合戦後から平泉に本拠地を移した後

後三年合戦における主な登場人物



樋口知志2011『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』高志書院より一部改編

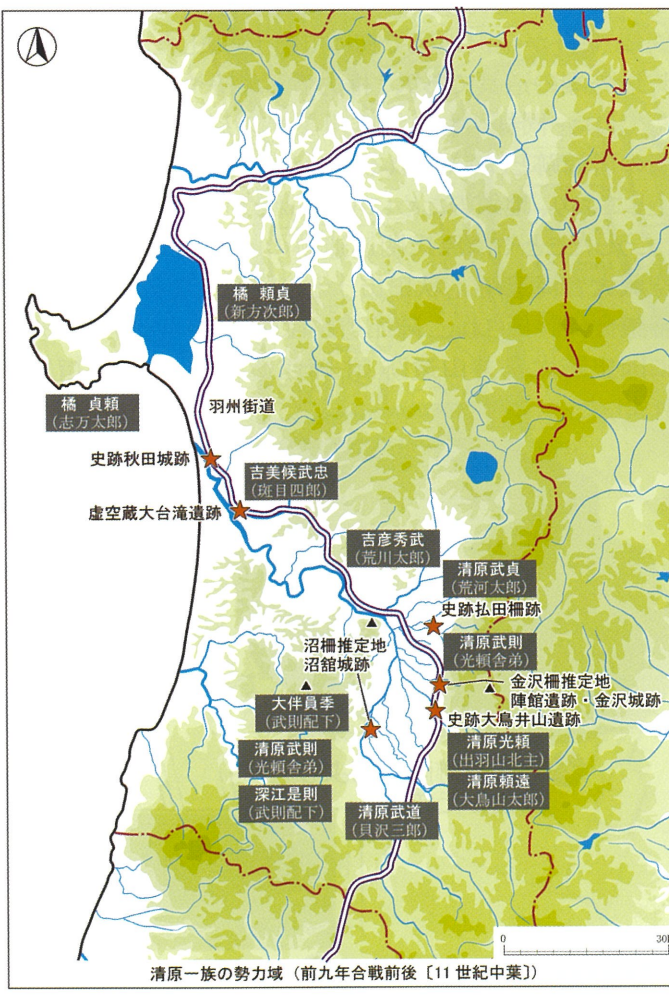
後三年合戦前後の清原氏の支配領域

前九年合戦の顛末を描いた軍記物語である『陸奥話記』には、源頼義からの要請を受けて、安倍氏追討のため清原光頼が下した清原軍の陣容が記されており、七陣編成でした。三千余りの頼義軍は、清原武則（光頼の弟）とともに第五陣に参陣し、第一陣は清原武貞（字は荒河太郎）、第二陣が橘貞頼（武則の甥、字は志万太郎）、第三陣は吉彦秀武（武則の甥であり婿、字は荒川太郎）、第四陣は橘頼貞（貞頼の弟、字は新方次郎）、第六陣は吉美候武忠（字は斑目四郎）、第七陣は清原武道（武則の弟、字は貝沢三郎）の計万余りの軍勢であったことが記されています。

このことから二つのことを読み取ることができます。一つ目は、清原氏が当時の人口規模から考えると非常に多い兵力である、七千余りの兵を動員することが出来る力を持っていたということです。

二つ目は、字と地名などからそれぞれの本拠地を想定出来ることです。平鹿郡は、横手市（旧平鹿郡）の東部と西部に二つの拠点があり、東部は遺跡の規模などから大鳥井山遺跡と考えられ、清原宗家の清原光頼・頼遠親子が本拠地としていたと考えられます。西部は、清原武則・深江是則・大伴員季が本拠地としていたと考えられます。

このような考えを基にして、各陣容の支配域を想定して作成したのが左図であり、清原一族が当時の秋田県のほぼ全域を支配域としていたことが考えられます。



かねざわのさく じん だて い せき 金沢柵推定地・陣館遺跡が国史跡に追加指定されました！

金沢柵推定地・陣館遺跡

金沢柵は、後三年合戦最終決戦の地であり、200年以上も昔から探索されてきました。市教育委員会では、金沢柵の場所を特定するために、清原氏関連遺跡として平成22年2月に国史跡に指定された大鳥井山遺跡と立地や地形などが似ている陣館遺跡の発掘調査を行いました。

調査の結果、北東尾根平坦部からは、大鳥井山遺跡のものと非常によく似た四面庇掘立柱建物跡（A～C）が検出されました。この建物跡は、桁行7間（14.1m）、梁行5間（9.9m）の面積約140㎡という非常に大きなもので、当時は国司の館や寺院などに用いられていたことから、非常に格式が高い建築様式で建てられたものです。

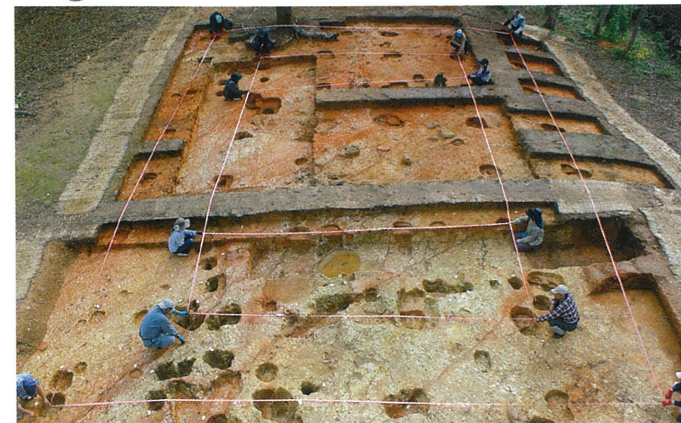
また、建物跡は羽州街道から見ると斜面の段状地形に囲まれるように建っており、この建物跡に向かっている道路跡も確認しました。最低6回にも及ぶ補修を繰り返しながら長い期間使用されたことから、参道ではなかったかと考えています。これらの建物・段状地形・参道の関係は、中尊寺金色堂の周辺状況と類似しており（D）、陣館遺跡は宗教空間（寺院）であった可能性が高いと考えられます。

さらに、遺跡南東斜面部の段状地形からは、後三年合戦前後のものと見られるロクロ土師器（かわらけ）と内耳鉄鍋（E）が金沢地区で初めて出土しました。鉄鍋は、当時最先端の道具であり、権力者しか持つことが出来ませんでした。同様のものが奥州平泉の礎を築いた藤原清衡の居館跡として知られる国史跡柳之御所遺跡からも出土しており、地鎮のために埋められた可能性があります。

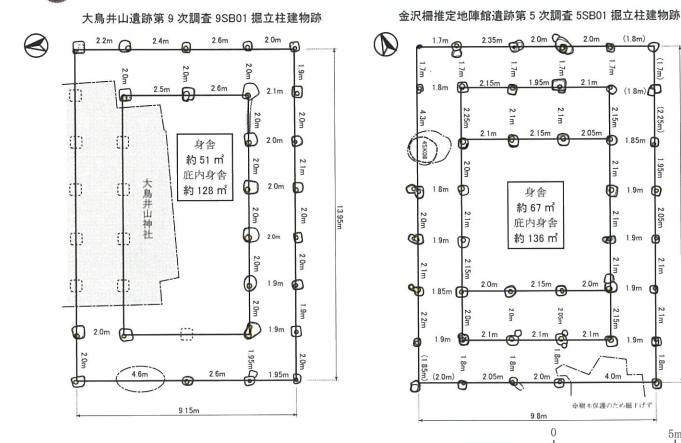
こうしたことや清原氏関連遺跡の一つとして知られる虚空蔵大台滝遺跡（秋田市）との類似性などが国の文化審議会に評価され、陣館遺跡は平成29年10月13日に国史跡大鳥井山遺跡 附 陣館遺跡として追加指定されました。



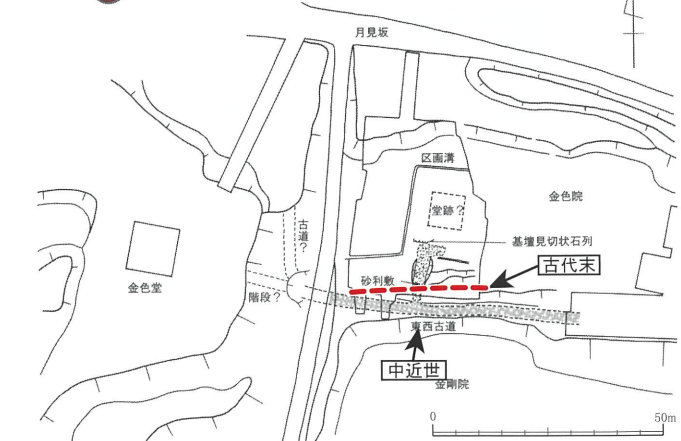
A 段状地形と四面庇掘立柱建物跡（東より）



B ピンクのラインが四面庇掘立柱建物跡（北より）



C 大鳥井山と陣館の四面庇建物比較図



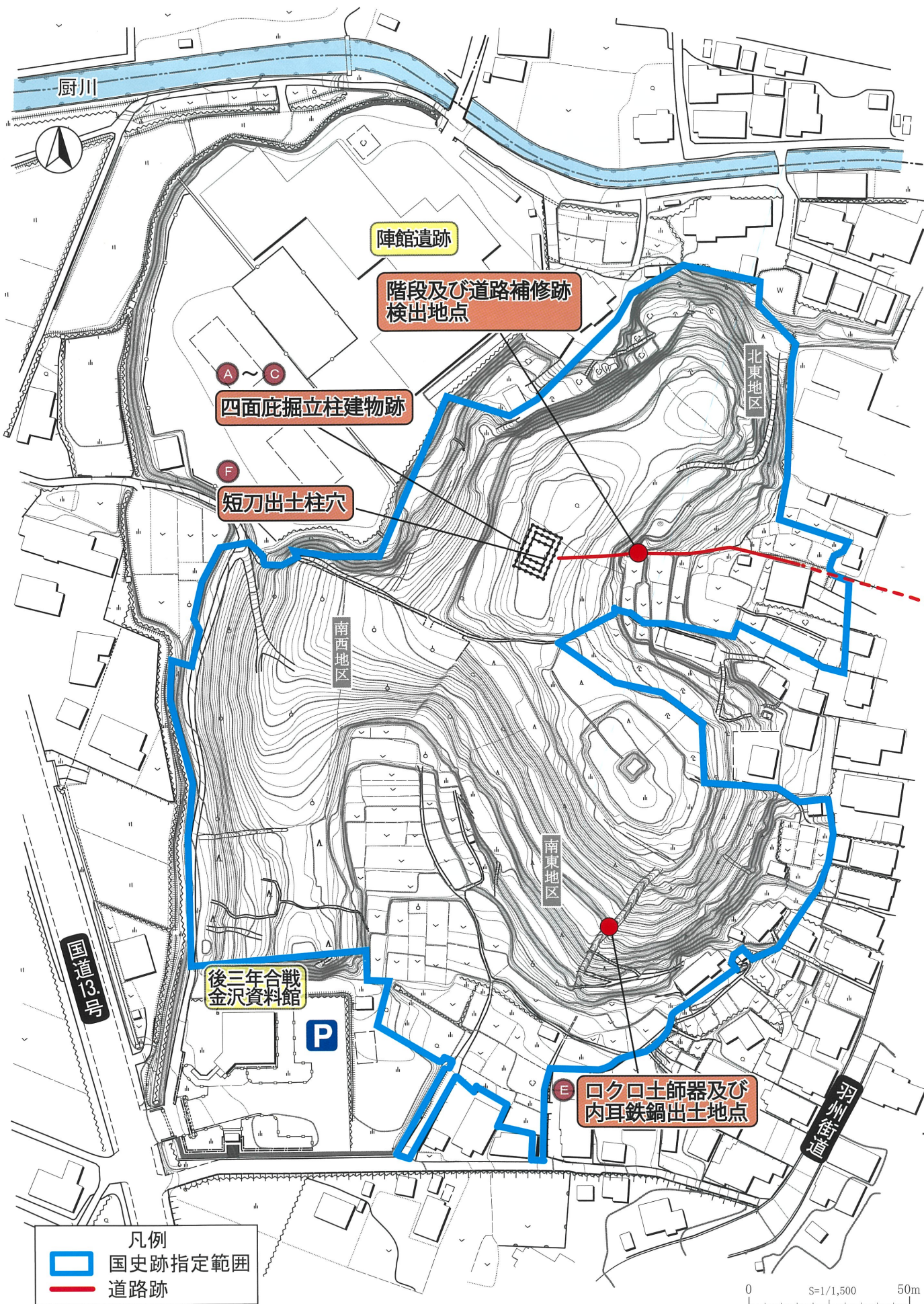
D 中尊寺境内金色院付近遺構図



E 陣館遺跡南西部より出土した鉄鍋



F 四面庇掘立柱建物の柱穴から出土した短刀



陣館遺跡地形図及び遺構・遺物検出地点

金沢柵推定地・景正功名塚周辺の調査成果



金沢柵推定地全景（陣館遺跡と景正功名塚周辺）（南から）

横手市教育委員会では、金沢柵の場所を特定するために、平成 22 年度から継続して発掘調査を行っています。金沢柵本体には館と区画施設（櫓・堀・柵列など）があることが想定されるため、平成 29 年度は羽州街道を挟んで陣館遺跡の反対側に立地するとともに、段状地形を有し、陣館遺跡や大鳥井山遺跡と特徴が共通している金沢城跡・景正功名塚周辺の斜面において、区画施設を検出することを目的として調査を行いました。

調査の結果、金沢公園西端の斜面において深さ 1.4m の場所から掘込地業を確認しました。掘込地業は薄く層状に重なっており、版築(土を突き固める方法)だと考えられます。さらに掘り進めると、幅 0.8m、深さ 0.4m の柱掘り方が確認され、その下から直径 35cm、長さ 85cm の柱材が検出されました (G)。



G景正功名塚周辺で発見された柱材

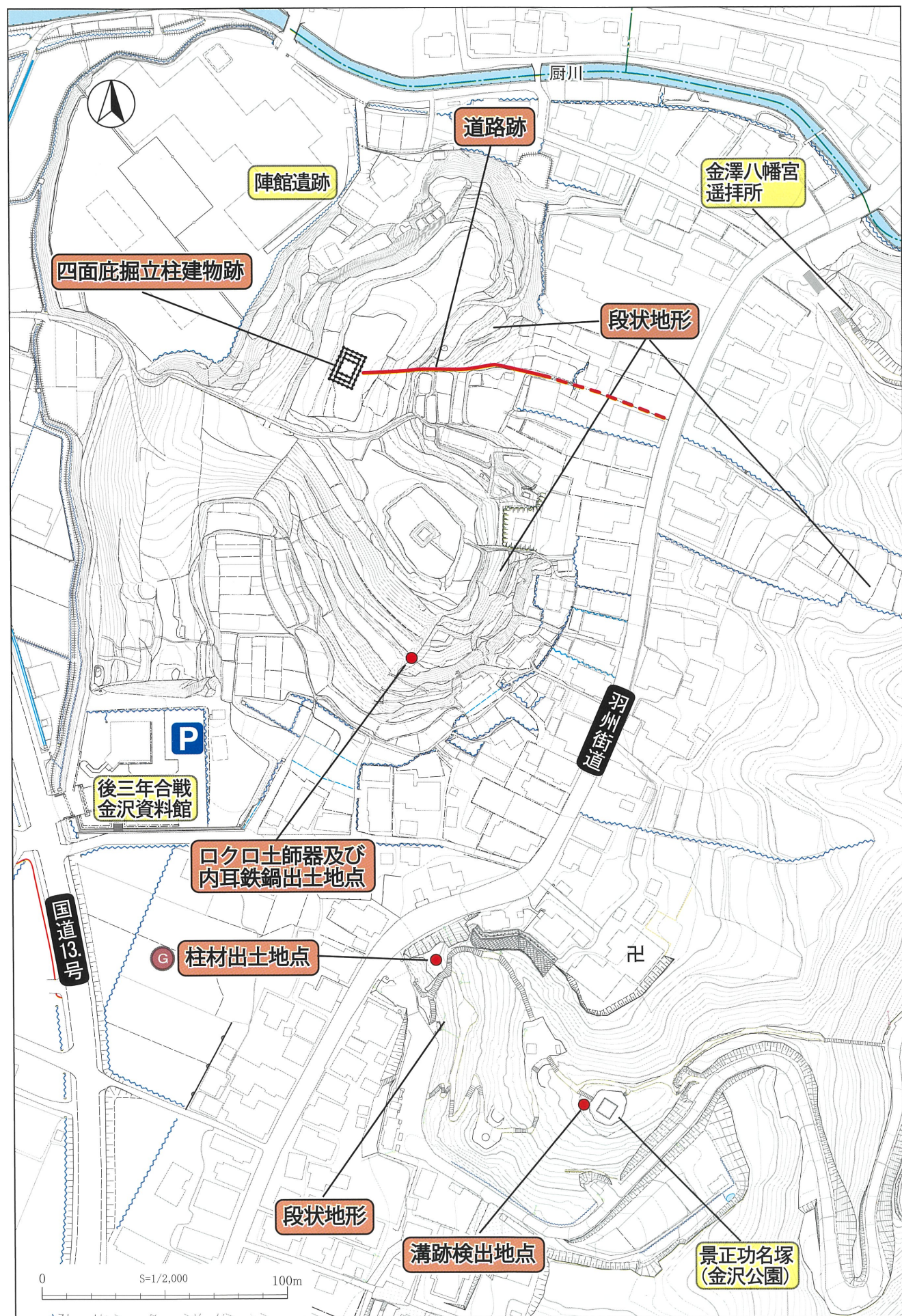
遺構の正確な年代は今後の分析を待つ必要がありますが、柱材の直径に比べて柱掘り方が大きく、古代的な特徴があることから、柱材は檼を構成していた可能性があります。檼があつたとすれば、後三年合戦絵詞に描かれているような建造物が想定されます(Ⅱ)。

また、景正功名塚付近において区画施設と考えられる溝跡を確認しました。これは景正功名塚自体が、かつて何らかの施設として使用されていた可能性を示す結果です。

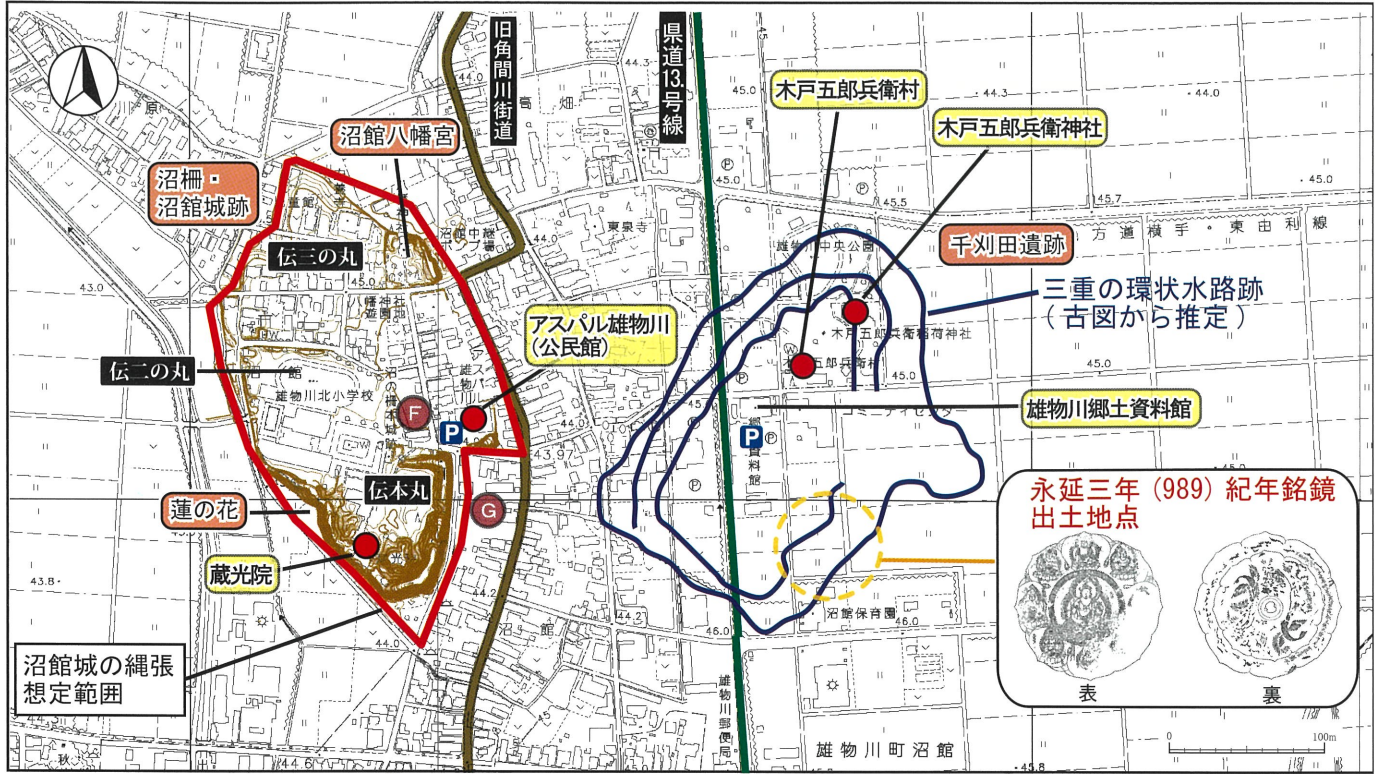
平成 30 年度は、引き続き景正功名塚において、櫓を構成する他の柱材を検出するとともに、柵列跡などを検出することを目的として調査を行う予定です。



●金沢柵の櫓・柵列（後三年合戦絵詞より 戎谷南山筆）



陣館遺跡及び景正功名塚周辺地形図



沼柵推定地・沼館城跡と千刈田遺跡の配置図

元慶の乱と町屋敷遺跡、そして沼柵へ

『日本三代実録』によれば、元慶二年(878)、秋田城司による過酷な重税の取り立てなどに不満を持った秋田城以北の蝦夷らが反乱を起こし、独立を要求しました。反乱軍は秋田城や役所の建物を焼き討ちし、次に雄勝城を狙おうとしました。

一方、中央政府は反乱鎮圧のために藤原保則を出羽権守、清原令望を権掾に任命しました。保則らは、秋田城以南の蝦夷に不動穀(非常用備蓄米)を山北三郡(現在の仙北・平鹿・雄勝郡)の俘囚に支給することで味方にし、反乱軍を攻めさせて半年後に反乱は鎮圧されました。これが元慶の乱であり、このことは山北三郡に正倉(米蔵)があったことを示唆します。

平成20年、蝦夷塚古墳群の西側にある町屋敷集落で行われた発掘調査により、10棟以上の掘立柱建物跡や多数の土坑や柱穴などが検出され、遺物から9世紀後半から10世紀前半の遺跡と見られます(N・O)。中でも、4間×3間=73㎡と非常に大きな総柱建物跡が2棟検出されました。この建物跡は、その構造から正倉であった可能性が高く、8,000斛(1斛=150kg、30kgの米袋4万袋分)もの保管能力があったと考えられ、元慶の乱で出てくる倉庫だった可能性があります。

また、江戸時代に千刈田遺跡(M)から永延三年(989)と刻まれた和鏡が出土しており(現在は行方不明)、当時貴重品だった和鏡を持つことが出来た人物が、10世紀代にもこの地にいたことの証拠となります。

この地には、8世紀中頃から継続して役所や有力者の居館などがあったことを示す遺跡が多数検出されています。後三年合戦の戦場となった沼柵は、突然この地に現れたのではなく、古代からの地域拠点を引き継いだ在地有力者がおり、その在地有力者が清原氏になっていったと考えることが出来るのです。



造山地区周辺の遺跡(9世紀中葉から後葉)



町屋敷遺跡の遺構配置図

古代城柵・雄勝城はどこにあったのか？



横手盆地(山北三郡)鳥瞰図と雄勝城推定地

幻の城柵・雄勝城

『続日本紀』によると、天平五年(733)に雄勝村に郡を建て、天平宝字三年(759)に雄勝郡と平鹿郡が置かれ、古代城柵である雄勝城が築城されたことが記されていますが、現在に至るまでその場所は特定されておらず、「幻の城柵」とされて来ました。

雄勝城の推定地には弘田柵説、羽後町足田説などがありますが、同時代の遺跡が横手市雄物川町造山地区に集中していることから、同地区に雄勝城があったと考えられます(I)。

造山地区周辺の発掘調査による成果はいくつかあります(J)。蝦夷塚古墳群(K)は8世紀中頃の集落跡であり、大規模な区画溝と多数の古墳や勾玉の首飾りなどが検出されており、古墳には在地有力者が埋葬されていたと考えられます。東槻遺跡からは円面硯と風字硯が出土しています。十三塚遺跡からは寺院や官衙(役所)でしか出土しない丸瓦と平瓦が出土しています。また、末館窯跡(L)は出土遺物の特徴から、8世紀中頃に活動を開始した横手盆地で最も古い須恵器窯跡であり、一般集落では見ることがない須恵器が大量に出土していることから、官窯であったと考えられています。

いずれも城柵官衙と関連の深い遺構・遺物であり、現在も弘田柵跡調査事務所により継続して行われている発掘調査の成果が待たれます。



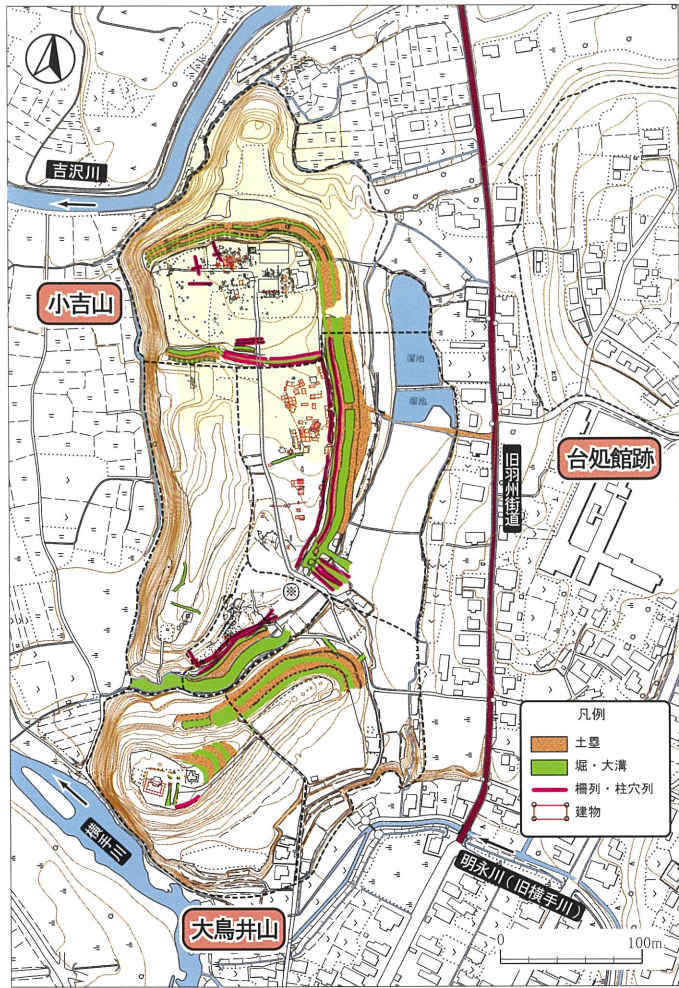
造山地区周辺の遺跡(8世紀中葉から後葉)



蝦夷塚古墳群の大規模な溝跡



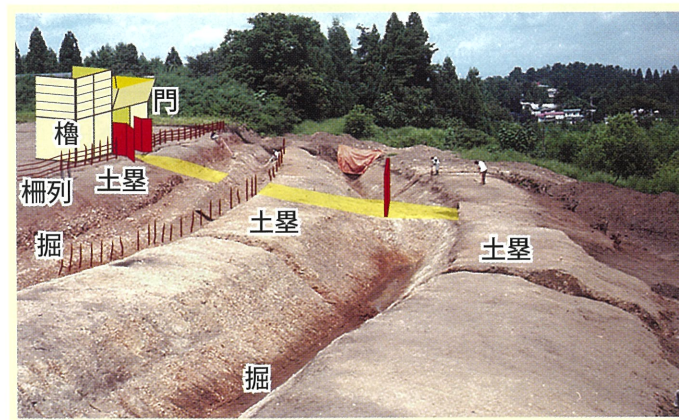
末館窯跡から出土した須恵器



大鳥井山遺跡地形図及び遺構配置図



U 金沢柵の戦い（後三年合戦絵詞・下巻 戎谷南山筆）



V 後三年合戦絵詞を参考にして推定した柵・門・柵列と堀・土塁（南より）

広大で防御性に優れた大鳥井柵

大鳥井山遺跡は、小吉山と大鳥井山の二つの独立丘陵に立地しており、北側の小吉山は面積が 73,400 m²、標高 77m、南側の大鳥井山は面積が 26,300 m²、標高 80m と非常に広大であり、西側に広がる低湿地からの比高差は 24m あり、見通しが良く、防御性に優れた場所と言えます。

小吉山東部には、内側の堀（幅 3m、深さ 1.2m）と土塁があり、土塁には柵列が巡らされ、その延長上には外側の堀（幅 9.7m、深さ 3.5m）と土塁（幅 10m、深さ 1.8m）が確認されています。この土塁と堀の長さは小吉山東部から北部までで推定 500m もあります。

これほどの規模で土木・建設工事を行うには相当の人員とお金が必要であり、当時の清原氏の力を伺い知ることが出来ます。

絵巻から飛び出した大鳥井山遺跡

後三年合戦の様子を今に伝える資料として、「後三年合戦絵詞」(U)が有名ですが、元になる絵巻は、合戦から 84 年後の承安元年 (1171) に描かれたものと考えられ、大鳥井山遺跡が発見されるまでは、絵巻は空想で描かれたものと考えられてきました。

しかし、発掘調査により明らかになった姿は、絵巻に描かれたものに酷似しており(V)、当時の柵の様子をある程度反映していると考えられるようになりました。こうしたことも評価され、大鳥井山遺跡は平成 22 年 2 月に国史跡に指定されたのです。



小吉山東部の堀・柵・建物跡（北東より）

清原氏の本拠地・大鳥井山遺跡

おおとりい やま い せき

清原光頼・頼遠親子の居館跡 大鳥井山遺跡



P 小吉山東部の二重の堀と土塁（西より）



S 大鳥井山山頂の四面庇掘立柱建物跡（東より）

世界遺産平泉の源流・大鳥井山遺跡

東北地方の古代城柵遺跡（役所跡）は、10 世紀後半には見られなくなり、代わって在地有力者の居館跡が活動期を迎えます。横手盆地にある弘田柵跡（大仙市・美郷町）もこれと同じで、弘田柵跡の終末期の土器と大鳥井山遺跡の初現期の土器が同じ形であることが注目されます。二つの遺跡では、中心域が低い丘陵や台地に作られ、宗教空間が比較的標高の高い場所に作られており、立地や設計思想も非常に類似しています。

こうした立地や設計思想は、後三年合戦で勝利した清原清衡が、藤原清衡として平泉に築いた柳之御所遺跡においても踏襲されたと考えられます。また、中尊寺の大長寿院で見られる土塁と堀は、大鳥井山遺跡の大鳥井山のものとそっくりのものが見られます。宗教空間に防御施設である土塁や堀を設置するという考え方は、日本でもこの時代の秋田県と岩手県でのみ見られるものであり、大鳥井山遺跡は世界遺産平泉の源流であったと考えられるのです(T)。

また、古代に拠点とされた場所には、それ以降も城館が築かれることが多く、一般的に 11 世紀代の遺跡が発見されることは珍しく、「空白の世紀」と称されています。こうしたことから、大鳥井山遺跡は「日本最古の山城」とも呼ばれています。

大鳥井山遺跡は、横手市の中心市街地に位置し、西・北・南を川に囲まれた独立丘陵である大鳥井山と小吉山に立地しており、遺跡の東側を羽州街道が走ります。市が実施した発掘調査の結果、小吉山では複数の掘立柱建物跡が検出されるとともに、周囲を巨大な二重の堀と土塁、柵列で囲まれており(P)、櫓と考えられる大規模な掘立柱建物跡を備えるなど、非常に防御性の高い居館跡であることが分かりました。遺物は大量のかわらけやロクロ土師器(Q)、須恵器、木製品のほか、極めて状態の良い石硯(R)などが出土しました。出土遺物の特徴から、遺跡の主要な活動時期は 10 世紀後半から 11 世紀末であることが分かっています。

また、大鳥井山山頂からは、桁行 7 間(13.9m)、梁行(9.15m)の面積約 127 m²の陣館遺跡のものほぼ同じ大きさの四面庇建物跡(S)が検出されています。四面庇建物跡は、東北地方では 12 世紀以降は見られない建築様式であり、建物跡の周囲から、かわらけなどの遺物が検出されていないことから、大鳥井山は宗教空間(寺院)であった可能性が高いと考えられています。

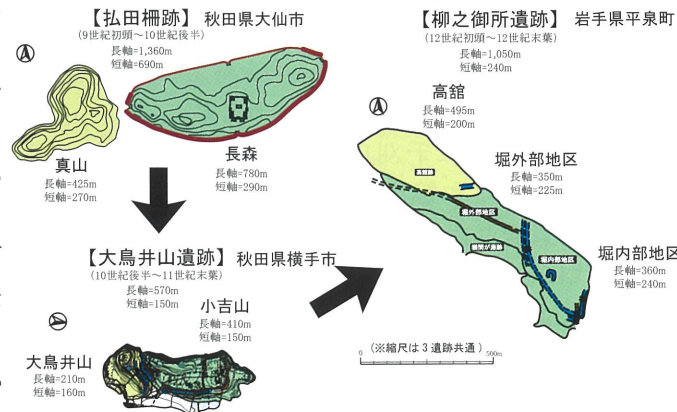
こうした特徴から、大鳥井山遺跡は、平安時代後期に北東北一帯を治めていた清原氏の本拠地である「大鳥井山」であり、清原光頼・頼遠親子の居館跡であったと考えられています。



Q 出土したかわらけ



R 出土した石硯



T 古代城柵から中世城館への変遷

横手のシンボル・横手城



柴田樸溪之筆「阿桜城（横手城）全景」（大正時代の回想図）（西より）

小野寺氏が築いた横手城

中世になると、下野国(栃木県)を本拠とする御家人の
小野寺氏が雄勝郡地頭^{おののでら}に任ぜられ、稲庭城を本拠としま
した。16世紀に入り、植道の代になると徐々^{おがちぐん}に北に勢力
を拡大し、平鹿郡に馬鞍・樋ノ口・鍋倉・吉田・金沢^{じょう}
など多数の支城を築いていきます。

その後、植道の子・輝道は1555年頃に朝倉城(横手城)を築城し、地の利の良さなどから本拠地を横手城に移転し、平鹿郡と雄勝郡の一部に勢力範囲を広げます。

小野寺氏は周辺の六郷氏ろくごうしや戸沢氏とさわし、最上氏もがみしなどと小競り合いを繰り返しながらも勢力を維持していましたが、「慶長五年奥羽合戦」(1600)において、徳川家康方についた最上氏と敵対したため、所領を没収され、横手盆地を去ることになりました。

●横手城と横手公園

横手城は、戊辰戦争(1868～69)によって焼け落ち荒廃していましたが、明治12年(1879)に本丸跡に秋田神社の分社が遷宮され、大いに賑わいました。明治35年(1902)には造園家・長岡安平ながおか やすへいらの手により近代的な公園として整備されました。

昭和 40 ～ 50 年代には、市民有志や横手市による植林や公園整備が行われ、昭和 40 年に整備された模擬天守は横手のシンボルとなっています。現在も利便性や景観向上のため公園整備が行われており、市民の憩いの場として親しまれ続けています。

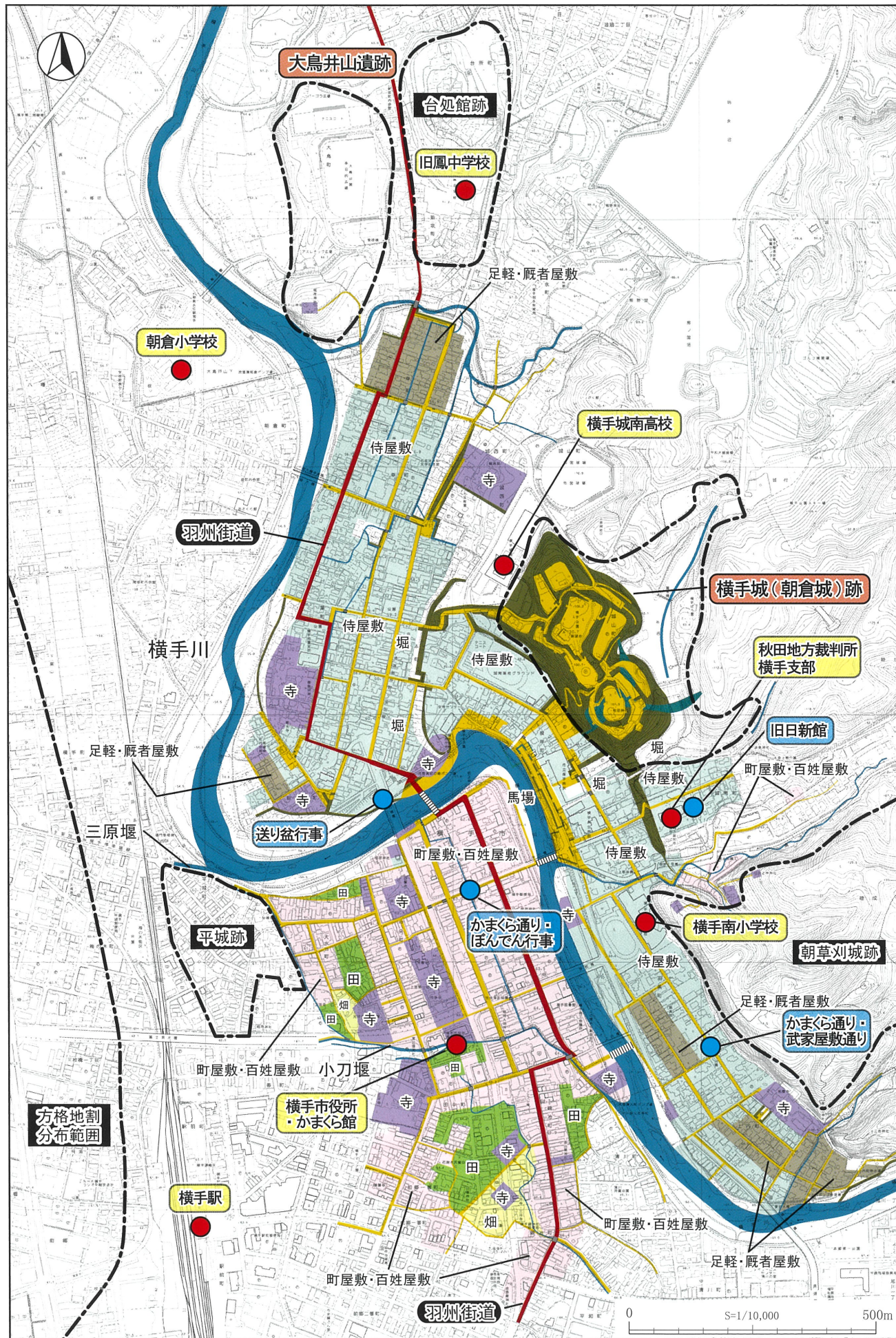


蛇の崎橋から見た横手城（西より）

佐竹氏と横手城代が築いた横手のまちなみ

慶長 7 年 (1602)、常陸国^{ひたちまくに}の領主であった佐竹義宣は関ヶ原の戦いで態度を明らかにしなかったため、出羽国^{でやまに}へ移封され、久保田城^{くぼたじょう} (秋田市) に入りました。家康は自らの支配体制を盤石なものにするために、慶長 20 年 (1615) に領内の支城を破棄させる一国一城令を発しましたが、秋田領では横手^{よこて}と大館^{じょうたい}の二城について存続が許されました。以降横手城には城代が置かれ、城代の下でまちづくりが進められました。

横手のまちなみや送り盆行事などの今に伝わる伝統文化は、長年城代を務めた戸村氏の下で発展したものであり、横手の基礎は小野寺氏が築き、さらに佐竹氏・戸村氏が発展させたものと言えるでしょう。



嘉永図・横手市都市計画図(2006年版)合成図

- ① 佐藤養助漆蔵資料館
【国登録有形文化財】
Tel.45-5430 無料

② まちの駅福蔵
(旧佐藤興五兵衛家) 【市指定文化財】
Tel.45-4190 無料

③ 旧石田理吉家
【市指定文化財】
Tel.45-5588 300円

④ 佐藤こんぶ店
Tel.45-3216 無料

⑤ 興文館東海林書店
【国登録有形文化財】
Tel.45-2015 200円
冬期間休止
- ⑦ 山中吉助商店
【国登録有形文化財】
Tel.45-3160 200円

⑧ 山吉肥料店
【市指定文化財】
Tel.45-2045 200円

⑨ 旬菜みそ茶屋くらを
(旧勇駒酒造) 【国登録有形文化財】
Tel.45-3710 無料・要予約

⑩ 佐藤又六家
【国重要文化財】
Tel.45-3150 300円

⑪ 佐藤多三郎家
【市指定文化財】
Tel.45-2715 200円・要予約
- ⑬ 旧村田薬局
【市指定文化財】
Tel.090-6457-3302 200円

⑭ 佐藤三十郎家
【国登録有形文化財】
Tel.45-2071 200円

⑮ 高橋茶舗
【国登録有形文化財】
Tel.45-2223 無料

⑯ 石直商店
【国登録有形文化財】
Tel.45-2130 200円

⑰ 升川商店(旧栄助商店)
【国登録有形文化財】
Tel.090-2794-4204 200円



奥ゆかしき商家のまちなみ 増田

増田の歴史

増田地域は江戸時代以降商業が盛んになったといわれ、生糸や葉タバコは一時秋田県最大の産地となり、増田は物資の集積地として大変賑わいました。

明治時代になると、増田銀行（現在の北都銀行の前身）や水力発電会社などが設立されたほか、吉乃鉱山の採掘量の増加もあいまって、さらに商業活動が活発となりました。この商業活動の中心になったのが、現在の通称本町通りと中七日町通りです。

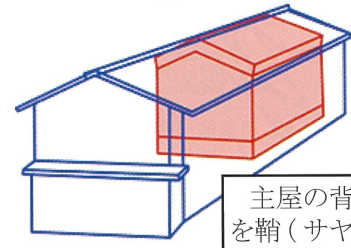
増田の伝統的建造物群保存地区とは

増田地域は、江戸時代に整備された地割や水路をよく残しています。敷地は短冊形に割られ、通りに面して主に切妻造妻入の主屋をおきます。その背後に主屋と連続する鞘付土蔵（内蔵）を接続して、敷地の半分以上を連続する建物で覆い、豪雪に対応するための長大な空間を作っています。その背後の庭に独立した外蔵や付属屋をおき、敷地背面が裏通りに接する敷地では通りに面して門、板塀を構えます。表通りと裏通りの景観では、異なる趣を見せるのも特徴です。

こうしたまちなみの価値が国に認められ、平成25年12月27日、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。保存地区を含む増田のまちなみでは、現在19棟で伝統的建造物や内蔵の見学が可能となっています。（観光に関するお問合せは、（一社）増田町観光協会 Tel.0182-45-5541）



⑥ 旧石平金物店の内蔵 撮影：杉本和樹（西大寺フォト）



内蔵とは？

主屋の背後に土蔵を建て、これを鞘（サヤ）となる上屋建物で覆い、主屋に接続させています。この土蔵は、増田においては「内蔵」と呼ばれ、雪国独特のものです。



旧松浦千代松家の外観（非公開）撮影：杉本和樹（西大寺フォト）



旧松浦千代松家の座敷蔵



⑩ 佐藤又六家の外観 撮影：杉本和樹（西大寺フォト）

●国の重要文化財へ指定されました！

平成29年2月23日、伝建地区内に所在する佐藤又六家住宅2棟（主屋・文庫蔵）、旧松浦家住宅3棟（主屋・座敷蔵・米蔵）の2件5棟が新たに国の重要文化財に指定されました。

いずれも増田の伝統的建造物の特色を良く残していること、当時の趣向や住宅の近代の変容を良く示していることなどが評価されました。

番号	分類	名 称	場 所	概 要
1	遺跡	国史跡大鳥井山遺跡	横手市横手	大鳥山太郎と呼ばれた清原頼遠の館跡
2	遺跡	国史跡陣館遺跡 (金沢柵推定地)	横手市金沢	源義家の陣営跡と伝わる
3	遺跡	金沢柵推定地金沢城跡	横手市金沢	金沢柵があった場所と伝わる
4	遺跡	沼柵推定地沼館城跡	横手市雄物川	清原家衡が籠った沼柵と伝わる。その後小野寺氏が沼館城を築き、古城跡には蔵光院が立地する
5	遺跡	鑑ヶ崎城跡	美郷町六郷	清原家衡の父である清原武貞の居城があった場所と伝わる
6	仏像	阿弥陀如来坐像(桂徳寺)	横手市金沢	後三年合戦で炎上する金沢柵を源義家が弓を立てて眺めたとされる弓立岡にあった阿弥陀堂に安置されていたとされ、後に阿弥陀堂が火災に会った際、この像も類焼し、崖下の厨川の底に埋もれ、後年発見されたといわれる。
7	仏像	銅造宝冠阿弥陀如来坐像(桂徳寺)	横手市金沢	源義家の郎党伴次郎倭倭仗助兼の兜守りと伝えられる。助兼は合戦において活躍するも、金沢柵の攻防において義家拝領の「薄金の兜」を失った。
8	社寺	貴船神社	横手市横手	源義光が進軍の折、横手川の水勢が激しく軍を進めることができず、京都の貴船神社の御神符を現在の場所にお納めして祈願すると、雨は晴れのぼり川水は金沢柵を攻め落とした。この成就により貴船神社を建立したと伝わる。
9	社寺	金澤八幡宮	横手市金沢	源義家が藤原清衡に命じて寛治7年(1093)に出羽鎮護のため創建させたと伝わる
10	社寺	兜八幡神社(兜石・兜杉)	横手市金沢	源義家と源義光を祀った神社。そばに兜石と呼ばれる石と老杉があり、源義家が凱旋の折に兜を埋めてその上に石を置いたとされる。
11	社寺	三嶋八幡神社(八幡宮)	横手市平鹿	源義家が後三年合戦に勝利したとき、この神社に馬鞍を奉納し、ご神体として祀られている。以降この地域を「馬鞍」と呼ぶようになったと伝わる。
12	社寺	首塚神社	横手市雄物川	沼柵の戦いの時に討ち取った一千の首を埋めた場所と伝わる
13	社寺	矢神八幡宮	横手市雄物川	前九年合戦の際、源頼義・義家が勝利を祈願し、成就したことから、後三年合戦の際に沼館にも造営したと伝わる
14	社寺	沼館八幡神社(納豆八幡)	横手市雄物川	源義家が赤梅壇の一寸八分の尊像を奉納したと伝わる
15	社寺	蔵光院	横手市雄物川	沼柵と伝わる場所に造営されたお寺
16	社寺	木戸五郎兵衛稻荷神社	横手市雄物川	菅江真澄の『雪の出羽路』によると、沼柵の一の木戸があった場所とあり、そこに建てられた神社
17	社寺	剣花山八幡宮	横手市大森	源義家が寛治3年(1089)凱旋の折に、鹿島・熱田両社に武運長久を祈って、薬師如来仏像を納め祀った
18	社寺	勝軍山神社	横手市大森	源義家が参詣し、清原武衡・家衡軍を滅ぼすことができたので、この神社がある山を「勝軍山」と名付けたと伝わる
19	社寺	宝龍神社(今木神社)	横手市十文字	天喜年間(1053から1057)村人たちが源義家に兵糧と鍋を献上したので義家はこの神社に参拝した。それから義家はこの地域を「鍋倉」と名付けたと伝わる。
20	社寺	仁井田八幡宮	横手市十文字	神体は片鎧、源義家が金沢柵攻めの時納めたと伝わる
21	社寺	八幡神社	横手市十文字	源義家が沼柵から敗走する途中、寒さと飢えにあい、当地で暖をとり、食事をした。のちに郷民が義家を慕い、この地に八幡神社を建立した
22	社寺	塩湯彦神社	横手市市内	延長5年(927)延喜式神明帳に記載された式内社。大鳥山を本拠とした清原氏がその祖先を祀った氏神とされる。正徳4年(1714)に再興。
23	社寺	阿気八幡神社(兜台神社)	横手市大雄	源義家が使用した片鎧を納めたと伝わる神社。前九年合戦のとき、源義家軍が清原氏を頼ってこの地に軍を引き揚げたことから、この地を「挙げ(阿気)の里」と呼ぶようになったと伝わる。
24	史跡	善明庵のマツ	横手市横手	後三年合戦(1083～87)の戦没者を埋葬した際に墓標として植えられたと伝わる。県指定天然記念物であったが立ち枯れし、平成29年に同じ遺伝子を持つ株が植樹された。
25	史跡	景正功名塚(権五郎塚)	横手市金沢	鎌倉権五郎景正は、後三年合戦において奮戦し功名を立てたとして、義家の命で敵の屍を集めて塚を作り、その上に杉を植えたとされる。現在は金沢公園として市民に親しまれている。
26	史跡	弓立岡	横手市金沢	後三年合戦終了後、源義家がこの岡で弓を立てて四方を眺めたと伝わる
27	史跡	立馬郊	横手市金沢	源義家が馬を止め伏兵を見つけた場所と伝わる
28	史跡	腰掛石	横手市金沢	源義家が腰を掛けた石と伝わる
29	史跡	柵内の沼	横手市雄物川	沼柵推定地内にあり、清原武衡と家衡が会談した場所とされる
30	史跡	平野沢の供養塔	横手市市内	安政2年(1855)出土の白骨を慰め冥福を祈って建立。前九年或いは後三年合戦で討ち死にした武将の遺骸とされる。
31	史跡	白滝観音	横手市市内	滝の中の岩の窪みに納められている如意輪観音像には、清原氏の出身という保昌房が納めたとの伝説がある
32	史跡	旧秀衡街道	横手市市内	奥羽山脈の金山から掘り出した金鉾を平泉へ輸送した道とされる
33	史跡	天陪の一本杉	美郷町仙南	源義家が合戦で討ち取った30騎余りの兵の屍を集めて首塚をつくり、その上に杉の木を植えたと伝わる
34	伝説・地名	蛇の崎	横手市横手	源義家が川を渡ろうとした際、橋から落ちたが蛇籠につかまり一命をとりとめた場所
35	伝説・地名	四十八小屋	横手市横手	満徳長者と地福長者がつくった「四十八小屋」は、源義家に占領され、金沢柵に米粒ひとつ入らなくなったと伝わる。現在も“小屋”という地名がいくつか残っている。
36	伝説・地名	御所野	横手市金沢	源義家が陣営を設けた場所
37	伝説・地名	天井沢(敵ヶ沢)	横手市金沢	源義家が敵陣を見下ろした沢
38	伝説・地名	物見	横手市金沢	金沢柵より物見を出し、陣所長根にある源軍の動静を偵察した
39	伝説・地名	厨川	横手市金沢	源義家の配下である鎌倉権五郎景正が片目を負傷し、厨川で傷を洗ったところ、その後片目のかじかが見つかるようになった。
40	伝説・地名	立石(楯石)	横手市金沢	源義家の軍が石を積み、盾とした
41	伝説・地名	西沼	横手市金沢	源義家が雁の乱れで、葦の間に潜んでいる清原武衡の伏兵を知り、これを殲滅した場所と伝わる
42	伝説・地名	陣ヶ森	横手市金沢	義家が陣営を設けて軍容を整えた場所
43	伝説・地名	蛭藻沼	横手市金沢	清原武衡が金沢柵落城の時、この沼で捕らえられた
44	伝説・地名	陣所長根	横手市金沢	蛭藻沼の西方にある小高い丘で源軍の戦陣が置かれていた
45	伝説・地名	鞍石	横手市金沢	清原家衡が愛馬「花麴子」を射殺し、乗り捨てた馬の鞍が化石となったもの
46	伝説・地名	真人山	横手市増田	清原真人武則の居城跡と伝わる。現在は桜の名所として有名な真人公園として親しまれている。
47	伝説・地名	八幡野	横手市雄物川	源義家が沼柵に攻めた時に陣を敷いたところ
48	伝説・地名	十足馬場	横手市雄物川	沼柵当時の馬場跡
49	伝説・地名	長岡森	美郷町仙南	合戦に敗れた清原家衡が下郎に身をやつして逃げようとしたが、捕まった場所と伝わる。別名武者隠しの森。
50	伝説・地名	千矢沼跡	美郷町千畑	源義家が合戦の勝利を祈願して、沼に千本の矢を放った場所と伝わる。以後この辺りを「千矢(屋)村」と呼ぶようになった。

📍横手市・美郷町における後三年合戦及び清原氏に係る伝承地とその概要

※伝承地等の位置については、⑰・⑱ページの地図をご覧ください。

現代に伝わる後三年合戦(史跡・社寺・地名)



大鳥山頼遠居館跡の石碑



鞍石(金沢地区)

古くから顕彰されてきた後三年合戦

後三年合戦は、横手で起きた大きな出来事であり、その舞台となった沼柵や金沢柵の場所については、古くから人々の関心を集めて来ました。江戸時代後期の旅行家・菅江真澄(🔴)が記した『月の出羽路』や『雪の出羽路』には史跡や地名など、後三年合戦にまつわる事柄が紹介されています。

また、明治25年(1892)、金沢の代議士で郷土史家でもあった伊藤直純と文人画家である戎谷南山らが中心となって後三年合戦などの調査・研究を行う「金沢保古会」が結成され、観光ガイドマップの走りである『出羽金澤後三年旧跡図』(🔴)などを刊行しています。



🔴桂徳寺・桂徳寺・阿弥陀如来坐像
銅造宝冠阿弥陀如来坐像

●後三年合戦から生まれた納豆伝説

納豆は後三年合戦がきっかけとなって生まれたという伝説があります。真偽のほどは分かりませんが、「沼館説」、「金沢説」、「大屋説」の三つの説が伝わっています。細かい描写は異なっているものの、源義家が登場することと、俵に入れた豆が糸を引き、兵が食べたなら美味しかったという点が共通しています。

現在でも沼館八幡神社では、旧暦8月14日の八幡神社宵宮の際に「八幡納豆」を販売しているほか、美郷町に本社を置く納豆販売会社は国内外に向けて納豆などを販売しており、納豆伝説は現代の生活にも受け継がれているのです。

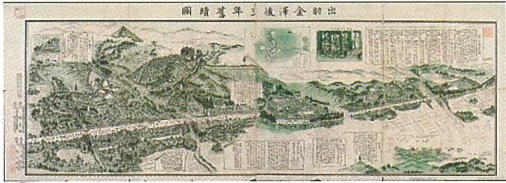
後三年合戦の関連遺跡や伝承地

後三年合戦に関連した遺跡や伝承は市内に広く分布し、謂れのある史跡や社寺のほか、地名という形で現在も多く残されています。このような伝承や史跡は、清原氏の遺跡があり、実際の戦場となったといわれる場所に近い大鳥井山遺跡から金沢城跡・陣館遺跡にかけての羽州街道沿いの横手地域と、沼柵があったと伝わる雄物川地域に特に集中しています(🔴)。

身近な社寺や地名の中に後三年合戦は今も息づいており、こうしたことが古くから人々の関心を集めてきた理由なのかもしれません。



🔴菅江真澄の肖像
秋田県立博物館所蔵



🔴出羽金澤後三年旧跡図(明治44年)

後三年合戦前後の仏像

東北の仏教文化と言えば、藤原氏が築いた平泉の中尊寺などに見られる絢爛豪華な建物などを思い浮かべる方が多いと思います。しかし、清原氏が支配していた後三年合戦前後の横手にも洗練された仏教文化が根づいており、左のような平安時代中期から末期にかけての仏像が現代のお寺に残されているのです(🔴)。

また、前九年合戦により滅亡するまで陸奥国を支配していた安倍氏が築いた国見山廃寺跡(北上市)には桁行21.7m、梁間8.2mの大型の仏堂などがあったことが分かっており、古くから安倍氏や清原氏が仏教を篤く信仰し、藤原氏がさらに洗練させたことで東北に仏教文化が花開いて行ったと言えるのです。



沼館八幡神社の八幡納豆



金沢城・「納豆発祥の地」の石碑

横手市・美郷町後三年合戦及び清原氏に係る伝承地マップ



⑧ 貴船神社

⑬ 勝軍山神社



⑬ 阿気八幡神社 (兜台神社)



⑭ 沼館八幡神社 (納豆八幡)



⑮ 宝龍神社 (今木神社)



⑭ 蔵光院 (沼柵推定地)



⑪ 三嶋八幡神社 (八幡宮)



⑤ 鎧ヶ崎城跡 (清原武貞の居館跡)



⑨ 金澤八幡宮



⑫ 塩湯彦神社



⑬ 白滝観音



⑫ 真人山 (真人公園)

※ 伝承地の概要については、⑬ページの一覧表をご覧ください。